

医学史警見」(大島智夫)という分担になっている。それぞれが二〇頁ずつという、これは正に「力わざ」というほかあるまいが、ベテラン諸家がそれぞれにこなしておいでである。

なお、付章として三〇頁近い「わが国における医学資料館」(井出研)がある。これは横浜市立大医学部同窓会関係者の間で「横浜医学資料館」の構想があつて調査されたもので、不完全と断つておられるが、この分類紹介は極めて有益な資料であり、担当者の労を多としたい。

ちなみに、本書の先行書としては、今回の執筆者の一人でもある大滝紀雄氏が一九八三年に本学会の学術大会を主宰された際の大会長講演を拡大して編述された『かながわの医療史探訪』(二七六頁、同年、秋山書房)がある。題名が示唆する通り脚も十分に駆使して伸び伸びと執筆されたまことに好ましい一冊であるが、残念ながら絶版になつて久しい。

それだけに価格格的にも入手し易い形で本書が刊行されたのは喜ばしいことである。ただ、版元が一般出版社とは異なるので、編者の一人である杉田氏にお尋ねしたところ、左記の販売店をわざわざ調査してご教示頂いた。いずれも定価は送料込みとのことである。

- ◇横浜市大生活協同組合(〒二三六〇〇二七・横浜市金沢区瀬戸二二二一・電話〇四五七七八一〇一九九・代表)
- ◇横浜市役所内市民情報センター(〒二三一〇〇一七・同市中区港町一一一・電話〇四五一六七一一二二二)
- ◇横浜総合医学振興財団(〒二三六〇〇〇四・同市金沢区福

浦三一九・電話〇四五七七八一八六三五)

(三輪 卓爾)

〔発行〕横浜市立大学一般教育委員会 発行元・横浜市立大学
教養部事務室 千二三六〇〇二七・横浜市金沢区瀬戸二二
一、電話〇四五七七八七二〇五五、一九九七年八月、A
5版三〇四頁、一五〇〇円〕

森 納 著

『歯の民俗―民間信仰・俗信・くすり―』

歯の神様・仏様 あこなし地蔵』

この本は郷土史の研究から民俗学に興味を持った著者が、少年の頃の体験からふと「歯痛に対する俗信、迷信が多く生まれ、身近な地藏や薬師如来などが信仰の対象になつていたのに、それが急速に衰退したのは何故か」と立ち止まつた所から出発して、それを手堅い民俗学の基本的な手法で追いつめて書いた本である。本当はその面では全くの素人の私などが紹介するなどと言うのは少し気が引けるくらいがっかりしたものであるが、それを承知で敢えて紹介する。

先ずこの本は全部で二二五の「歯の神様」、「歯の仏様」(地藏さま、薬師如来、観音菩薩、人々)、「その他の歯痛信仰」、「首から上の病氣祈願」、「諸病平癒祈願の神仏」の実物について、北は岩手県から南は熊本県までに互つて実際に著者が足で確かめて誌している。

机の上でインターネットで集めた情報とは違って、総ての

内容に確かな臨場感が読み取れる。だから今は実際にはすでに失われてしまったものに就いても追及されている。

この中に拾い出されているものの数を都府県別に調べて見ると、東京20、京都、大阪各18、長野、愛媛各12、滋賀、鳥取、島根、兵庫各10、山梨、新潟各8、石川、神奈川各7、和歌山、徳島、熊本、大分各5、埼玉、千葉、広島、山口、福岡各4、宮城、群馬、富山、静岡、三重、奈良、岡山各3、岩手、福島、滋賀、香川、高知各2、茨城、岐阜、佐賀各1、という様になっている。地域も数も大変な広がりとな数である。また著者はこう言う即物的なものを拾い挙げただけでなく、*「歯の風俗」*、*「歯に関する俗信、迷信」*、*「歯痛と民間療法」*、*「家伝薬、漢方療法」*についても色々拾い出している。集大成と言ったら著者は遠慮してそう言うて呉れるなと言いつつ、実際は限りなくそれに近い事は間違いないと言える。拾い出された文献も二八五にも及んでおり、勿論私等は初めて見るものが大部分であるが、この面からも充分な追及がされている事が充分くみ取れる。今後こう言う面で何か言う時は、この本を通らずには一寸恥ずかしい思いをすることになると思う。

歯痛についてはあのガレヌスも「人を殺すことのない最大の痛みは歯痛である」と述べているが、人類のこれに就いての対応には色々の事がなされている。

外国でもこの本の様なものもきつとあるにそういないと思うが、そういうものは外国人には目には触れにくいと思う。

終わりに贅辞に代えて歯痛が歴史を動かしたエピソードを一つ添えてみると、日本の歯科医学教育のルーツとなった高山歯科医学院を創立した高山紀齋は、米国留学中に急性歯髓炎に見舞われ、その処置が動機でその時の歯科医の Van Der burch に就いて歯科医学を志し、そこで学んで帰国して今日の東京歯科大学の前身である高山歯科医学院を創立する事になった。

今日の日本では歯科医療へのアクセスが極めて容易になったので、こんな事は起こりにくいし、著者も述べている様に「あごなし地蔵」や「おびんずるさん」の様なものも衰退してゆくと思われる。そういう中で、この本の意味の重さを改めて思い返すのである。

(榊原 悠紀田郎)

(発行元：千六八〇—一三六・鳥取県岩美郡国府町糸谷一—
一五森納 電話〇八五七—二一六五三九、平成十年五月、
B5判一九三頁、四五〇〇円)

鈴木七美著

『出産の歴史人類学』

本書は薬学を専攻し、後医学社会史に興味を覚え、「歴史人類学」的立場から出産を取り上げた著者の学位論文を本にしており、文献の引用も豊富で、多彩な考按を加えた註と相俟って、本格的な学術書の体裁をなしている。助産史をテーマとしている評者も、一読して多くの示唆を受けた。特に十九